

日本の幼児教育の改革

無藤 隆（白梅学園大学）

1. 日本の幼児教育施設の教育のあり方を統合する

- ▶ 幼児期の施設（幼稚園、保育所、認定こども園）での教育を「幼児教育」と呼ぶ。なお、幼稚園は3歳から1日4時間程度、保育所は0歳ないし1歳からで一日8時間から11時間程度、認定こども園は二つを合わせたものである。
- ▶ 国の指針として3歳以上について共通の記載とする。教育の内容と内容を同一とする。

2. 幼児教育と小学校以上の教育をつなぐ

- ▶ 資質・能力の考え方によって、幼児教育と小学校以上の学校教育で育成される子どもを力を共通に表す。それらは、知識と思考力という知的な力と情意的・協働的な力からなる。相互に循環的に育成されていく。
- ▶ 幼児期の終わりに育ててほしい子どもの姿を明確にして、それに向けての指導を強化する。それとともに、小学校はその姿を受けて、伸ばすところから開始する。

3. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- ▶ 5歳児後半に特に伸びていく活動内容を10個にまとめて表す。それらは能力や成果ではなく、様々な活動を通じて現れる子どもの具体的な様子である。
- ▶ それは次からなる。多くの研究や実践を受けて、知的な面、情意的自己統制、人間関係や協同、等を幅広く示している。

①健康な心と体（健康の保持と運動）、②自立心（自己統制する力）、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え（共感性や規則を守り自己調整する力）、⑤社会生活との関わり（多様な他者との付き合い）、⑥思考力の芽生え（規則性や仕組みへの好奇心と探究心）、⑦自然との関わり・生命尊重（生命と非生命への理解と興味）、⑧数量・図形、文字等への関心・感覚（記号への感覚的感性的な理解）、⑨言葉による伝え合い（絵本、言葉による大人と子どもの対話、子ども同士の言葉その他によるやりとり）、⑩豊かな感性と表現（表現に向けての完成の育ち）。

4. 幼児教育の構造

<入り口>

<出口>

カリキュラム・マネジメント



カリキュラム

・プロセス

環境としての保育

主体的活動としての遊び

保育者の援助

乳児保育
家庭での養育

⇒ ・資質・能力の柱 ⇒ 幼児期の終わりまでに⇒ 小学校
・内容（5領域） 育ってほしい姿



（養護性） ⇒ 情緒の安定、生命の保持 ⇒

5. 構造的条件・前提的条件の改善

- ▶ 2015年より、子ども・子育て支援制度が始まり、すべての幼稚園・保育所・認定こども園などを包含する中で、7千億以上の新たな国の予算が投じられた。それは、保育所に入れない待機児童をなくすと同時に、幼児教育・保育の施設や事業の質の向上を目指している。
- ▶ 待機児童の解消は同時に、女性の労働参加への支援策でもある。
- ▶ 保育者一人あたりの子どもの数を減らす。例えば、3歳児では、20人に一人を15人に一人とした。
- ▶ 民間の保育者の待遇を改善する。この5年で平均して、20%近く上がった。
- ▶ 経験のある保育者について、年に48万円まで手当を増やす。
- ▶ 処遇改善をいずれ研修の履修と連動させるポイント制を導入する。
- ▶ 現在、保育者のキャリア別の研修の仕組みを構築しようとしている。それに応じて、何らかのインセンティブを提供できる仕組みとする。
- ▶ 養成課程の質の保証を進めるため、そのカリキュラムの国の規定による一定の明示と、養成校教員の研修の仕組みを作る。